

震災の津波で失われたふたつの診療所が仙台市中心部で再建。共同診療がスタート。

東日本大震災被災民間医療機関再建プロジェクトの最初の一步として、発起人である本田英彦氏が院長を務める一番町南診療所が昨年5月、仙台市中心部に開院した。そして1周年を迎える今年5月、同医療施設内に新たなクリニックが開院し、患者が病院外来に求めていた専門性を診療所で提供するという1次医療の形態を実践するための用意が整えられた。新クリニック開院前の医療施設をお訪ねし、英彦氏の義父でもある医療法人社団茜会理事長の山本伸一氏、新たに開院するあかねクリニックの本田元子院長（山本氏の長女で英彦氏の妻）、山田立子副院長（山本氏の次女）に現在に至るまでの経緯や今後の医療方針などについて、プロジェクトの旗振り役でもある英彦氏を交えお話を伺った。

「新クリニックの開院が目前に迫りました。前身の診療所である医療法人茜会の山本医院は、荒浜で東日本大震災による津波の被害を受けたとお聞きしています。」

山本…はい、荒浜で30年ほど開業しておりました。3月11日は地震が起きた後、患者さんを帰宅させると病院に隣接する自宅にいたのですが、最後まで残っていた職員が病院の戸締りを終えてカギを届けに来た際、私の耳に「ゴーツー」と地鳴りのような音が飛び込んできました。同時に正面玄関から黒い水がどつと流れ込んできましたので、職員、妻と3人で急いで2階へと駆け上がり、間一髪のところで津波に呑み込まれずにすみました。

「娘さんでもある本田院長と山田副院長はどちらで被災されたのですか？」

元子…私は当時仙台通信病院皮膚科に勤務していたのですが、ちょうど産休で仙台市内の自宅におりました。両親もそうだったと思うのですが、病院に津波がやって来るなどということとは全く想像していませんでした。

山田…私は週に1日山本医院で内科の診療にあたっていたのですが、震災時は自宅がある神奈川県の藤沢にいて、ちょうど母親

と電話で話をしていたのですが直後から不通になり、その後父親からのメールで被災したことがわかりました。すぐに警察や放送局などに電話を入れて実家が孤立している状況を通報し、翌朝マイカーで実家へと向かいました。

「津波から逃れた後どのように過ごしておられたのですか？」

山本…津波の水位はすぐに2階まで到達しましたので病院3階の踊り場へと避難し、3人で不安な時間を過ごしていました。暫らくは病院廊下の非常灯が足元を照らしてくれていたのですが、それが消えた後は暗闇となり、周囲の物音も無く不気味な夜を迎えるのですが、隣の家の屋根上に避難をしていた若者がなかなか水が引かない為不安になったのか、泥水の中を3メートルほど泳いでこちらへやって来たのには大変驚きました。雪もちらつく中4人で毛布に包まって一晩を過ごし、翌日のお昼前には愛知県



一番町南診療所外観
(仙台市青葉区北目町3-9)

すぐに被災地で病院を再建するのは難しいと考え、気持ちを新たに切り替えられる場所を探して共同の診療所を建設しようと決めました(英彦)。



本田元子院長は長年仙台市内の総合病院で、院長として毎日50人以上の患者の診察に当たってきた

から応援に来たヘリコプターに救助していただくことができました。荒浜の病院と自宅は失う結果となりましたが、親戚の助けを借りてその日の夕方には元子と顔を合わせる事ができ、翌朝には神奈川から駆けつけてくれた立子にも会うことができましたので、幸運の女神が私達夫婦に味方してくれたのだと思っています。

—英彦先生はどうされていたのですか？

英彦…私はJR仙台病院で勤務中でした。震災後は150名ほどの患者さんを受け入れて治療にあたっておりましたので、家族や実家の心配をしながらも順番にできることをしておりました。南三陸町で開業していた実父はこれまでに大変な努力と苦勞をしながら様々な人生の困難を自ら乗り越えてきましたので、自分は余計に心配することとせず、比較的冷静に対処できる立場にありました。それでも、いろいろな方々の

お陰で震災から4日目に仙台へとやって来た父親の顔を見た時には、正直安堵しましたね。

—荒浜の山本医院、そして南三陸町の本田記念あおいクリニックと、両家のお父様が長年地域医療の拠点とされてきた診療所が同時に被災し、一瞬にして失われたわけですね。

英彦…お義父さんの病院があった場所は更地になっていますし、父の診療所があった場所も震災以降、満潮時には30cm浸水する状況です。どちらの地域も住民の数はかなり減ってしまいましたし、すぐに被災地で病院を再建するのは難しいと考え、気持ちを新たに切り替えられる場所を探して共同の診療所を建設しようと決めました。

—東日本大震災被災民間医療機関再建プロジェクトが始動するわけですね。英彦さんのプランを聞かされて皆さんはどう思われたのですか？

山本…大変嬉しかったですね。私も震災後1ヶ月ほどは休養させてもらったのですが、だんだん退屈になってきました(笑)、その後はいくつかの医療施設でかけもち勤務をさせていただきました。英彦さんのプロジェクトのお手伝いができるならと思います、娘達と喜んで協力させてもらうことにしました。



2011年3月12日午前、愛知県からのヘリコプターによって救出される山本氏(森健輔「巨理町荒浜～東日本大震災一ヶ月の記録」より)

山田…私も近い将来父親と医院で一緒に仕事するつもりで準備を進めていた矢先の被災でしたので、これからどうすればいいのだろうと不安でしたが、義兄の考えを知り是非新しい診療所で一緒にやりたいと思います、こちらへと戻って来ることにしました。

—お父様をはじめ、親族である皆さんの心強いバックアップがあってプロジェクトは前へと進んでいったわけですね。

英彦…震災後、日本人の生き方や価値観というものは確実に変化したと思うのです。それまで漫然と生きてきたけれど、生きることの尊さを実感したという人は多かったのではないのでしょうか。ただ被災した人々、例えば身近なところでは両院のスタッフ達にしても力強く生きてゆかなければいけないけれど、現実として壊滅状態の被災地で自立するというのは大変難しい。初めの一步として事業基盤を用意することさえできれば、生きるプロセスで夢や希望やエネルギーが生まれる筈だし、皆でひとつの目標に向かって突き進む勇気も漲ってくるに違いない

患者さんにとって何でも相談できて、安心してご自宅へ戻っていただけるクリニックを目指したいですね(元子)。

interview



皆で一緒に働けることが嬉しいと口々に語る

いと漠然と感じました。東北経済の中心地にまずシンボルとなる医療施設を開設して強固な財務基盤を確立できたなら、遠くない将来長年携わってきた地域医療にふたたび貢献することも可能になると思ひ、震災翌年には父とお義父さん、そして立子先生や旧クリニックのスタッフ達と共に一番町南診療所を開院することができました。

そして1年後、奥様である元子先生が院長を務める「あかねクリニック」が開院の運びとなりました。

元子：ありがとうございます。皆で一緒に診療できることはとても嬉しいですし、総

合病院に近いかたちで私達ドクターがそれぞれの専門分野を活かして患者さんの診察にあたる体制が整いました。

山田：首都圏でエンジニアをしていた夫と仙台へ移り住み、家族と一緒にこの施設で働けるようになったことが大変嬉しく、関係者の皆さんに深く感謝しています。

英彦：消化器外科・皮膚科・消化器内科・循環器内科・心臓外科と、それぞれの分野の第一人者である5名の医師が患者さん達のニーズに合わせて高度な専門性と診療水準を発揮するのは無論ですが、同時に医療者として人格的にも皆さんから信頼を寄せてもらえるような診療活動を目指したいと思ひます。器が最初にありきの医療モジュールとも違い、むしろ私達自身が求める医療の集合体という姿が結果として実現したかたちの医療施設となりました。

「これからのようなクリニックを目指してゆかれますか？」

元子：患者さんにとって何でも相談ができて、安心してご自宅へ戻っていただけるクリニックを目指したいですね。特に女性の皆様には、日常生活の中でのストレスを軽減するお手伝いができれば良いと思ひています。

山田：父も昔から患者さん達がとても話しやすいタイプのかかりつけ医でしたので、これは姉や私も含めて山本家の特長なのかもしれません(笑)。

山本：患者の皆さんとは、できれば家族ぐるみのお付き合いがしたいですね。そうすることでより深く病態を観察することが可能にもなりますので。荒浜では私の父親の頃から地域医療に携わってきましたし、英彦さんのところも志津川町でお爺様の代から地域の皆さんと長年信頼関係を築き上げてきたという歴史があります。

英彦：父や義父が実践してきた地域医療というのは、携わる医師にとっても自己犠牲を伴う大変なものであったと思うのですが、長年に亘り培われてきた「思い」というものは新しいクリニックでも患者の皆さんにしっかりと伝わるものだと思います。

「最後に読者へメッセージをお願いします。」

山本：第一に生活習慣病の早期発見を心掛けていただきたいと思います。診療に関しましてはふたつの診療所間での紹介は勿論、重篤な症状の場合でも、充実した医療連携によってより高度な治療を行える医療機関をご紹介できますので、安心してご相談ください。



震災後の南三陸町、本田記念あおいクリニック(右は英彦氏の父で一番町南診療所名誉院長の本田剛彦氏)

患者の皆さんとは、できれば家族ぐるみのお付き合いがしたいですね。そうすることでより深く病態を観察することが可能にもなります(山本)。

interview



5月7日に開院する「あかねクリニック」の内観は白を基調とした明るいイメージ

元子：個々の患者さんと深くコミュニケーションをとりながら内面と外面の双方から総合的に治療させていただくことで、皆さんが快適に生活してゆくお手伝いができれば良いですね。私の専門である皮膚科では最新の美肌治療機器を導入し、光治療とレーザーによる主にしみを中心とする色素系のスキントラブルを改善し、美肌を目指していく治療も行って参りますので、お肌のことでお悩みの方はぜひ一度受診されてみてください。

山田：私は健診施設での勤務経験もありますので、予防を行いながらの治療を心掛けたいですし、皆さんの生活の中に入り込んだ診療活動を目指したいですね。その為には敷居を低くして、どなたでも気軽に足を運べる、皆さんの役に立つ診療所の確立を進めてゆきたいと思います。

英彦：あかねクリニックは3人が中心となって運営する診療所ですが、私が院長を務める階下の一番町南診療所と同様に21世紀を見据えた医療を患者の皆さんに提供して参ります。今後この施設では薬局も含めて総勢27名のスタッフが勤務することになりますが、震災後ここへ至る過程で本当に多くの方々に助けていただきました。ですから、我々はお人様のお役に立ちたい集合体なのです。その思いのエネルギーはこの医療施設全体に満ち溢れている筈ですので、体のごとお悩みの方にはお気軽にご来院いただきたいと思っています。